

いとうしゅんや／患者中心の医療実現のために、国内外を問わず数多くの医療現場を取材。「現場こそ真実がある！」と医療改革のため、多くの問題提起をする。著書に「最強ドクターの奇跡」など

State-of-the-Art Medical Treatment in Japan by Shunya Ito

その治療法は本当に効くのか

行つて、見て、聞いた

連載第十回

医療ジャーナリスト・写真家

伊藤隼也

# 虚血性心疾患

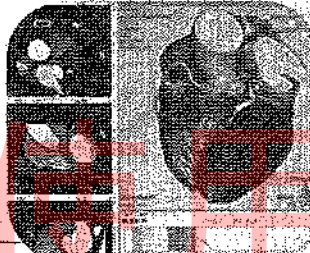
狭心症は心筋に栄養を送る冠動脈の狭窄によって起こる。少くも胸痛や放散で胸部に締めつけられるような痛みを感じる。深夜や早朝に胸が痛くなって目が覚める。胸はかりや重く、前胸や、左肩、左腕に放散痛が起る場合も「マルチスライスCT」は「ブラーク」も診断可能

好みの異性に、ドキドキ、した思ひ出が記憶の彼方へ遠のくと、今度は、ドキドキ、そのものに「喜一憂することになる——日本人の死因の第2位を占める「心疾患」のことである。特に、心筋に栄養を送る冠動脈が細くなつて起こる「虚血性心疾患(狭心症・心筋梗塞)」は、現代人が注意すべき心疾患の筆頭に挙げられる。

「この頃、階段を駆け上がると動悸がして胸が苦しい……」  
こんなときは狭心症に要注意。放置すると命を落とす原因にもなりかねない。主な原因は動脈硬化で、高血圧や高脂血症、糖尿病、さらには喫煙や肥満なども危険因子となる。  
最近、虚血性心疾患の検査とし

「心臓CT検査」がにわかに関心を浴びているが、この検査の実力を確かめるべく、6000例以上の実績を持つ群馬県高崎市の「高瀬クリニック」を訪れた。  
ベッドに横たわった患者の前には、ドーナツ形の巨大な機器が鎮座している。これが「64列マルチスライスCT」だ。64個の検出器(画像の撮影装置)を備えており、一回の検査で撮れる40

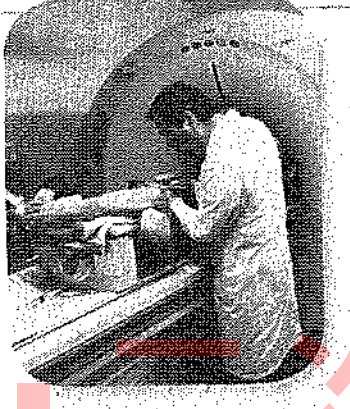
(左)撮影の前に、息止めの指導をする近藤医師。丁寧な準備が信頼性の高い検査結果をもたらす(下)モニターに表示された高精度な3次元画像



0枚ほどの画像を組み合わせ、心臓とそれを取り巻く冠動脈の3次元画像を生成することができ(上写真)。近藤武医師が、患者に検査の手順を説明する。  
「撮影するときには、機械が「息を止めてください」と言いますから、軽く息を吸って15秒だけ息を止めてください。じゃあ練習してみようか……。ハイ、そう。これを3度繰り返して、4度目が本番です」

ここでは予約なしでも受けられる。命にかかわることもある病気だけに、患者としては心強い。  
これまで、狭心症や心筋梗塞の検査といえば「心臓カテテル検査」が常識だった。手首やそけい部の動脈から挿入した細い管(カテテル)を心臓の冠動脈の入り口まで通し、造影剤を流しながらX線撮影するのだ。局部麻酔で行う簡単な検査だが、出血のリスクなどがあり入院が必要。気軽に受けられる検査ではない。

一方、マルチスライスCT検査は日帰りが可能で、痛みや出血もない。診断上のメリットについて近藤医師はこう説明する。  
「マルチスライスCT検査で虚血性心疾患がないと診断された場合、その後心臓カテテル検査で



も心拍数が下がらない場合は、心拍の上昇を抑える「βブロッカー」を注射する。こうした細やかな対応は、循環器内科の医師が検査に立ち会ってからこそ可能なことだ。放射線科の医師がCT検査のインシアチブをとる大病院では、なかなかこうはいかない。

チスライスCT検査を取り入れている。その是非について議論が分かれてはいるが、近藤医師はこう断言する。  
「被曝量を減らす努力をしない医療機関ではやるべきではありません。仮に健診に使うなら、微量の被曝で済む320列などのさらに高性能なCTが必要ですね」

も97〜100%の確率で病変は認められないというデータがあります。虚血性心疾患の疑いがある患者さんから、病気の可能性がない人を除外できるわけです」  
さらに、この検査ではブラーク(血管に溜まるコレステロールの塊)の状態を鮮明な画像で確認できる。ブラークが破裂すると、最悪の場合は急性心筋梗塞を引き起こす。心臓カテテル検査では見つけられない病気の危険性を見つけられる意味でも非常に有益だ。  
一見いいことづくめのCT検査だが、リスクもゼロではない。その代表が被曝の問題だ。人体が基準値以上の放射線を浴びると、がんや白血病などの危険性が高まるといわれている。

少々の被曝のリスクは正当化されるべきです。心電図のデータから狭心症や心筋梗塞が疑われる人、糖尿病や高脂血症などの危険因子を持つている人などにとっては、この被曝量をもってしても大きなメリットがあるといえるのではないのでしょうか(近藤医師)  
ただし、相手は休むことなく動き続ける心臓だ。一瞬でブレのない画像を撮影するためには、心拍数を60以下に下げ、心臓の動きの少ない時間を確実に捉えなければならぬという。近藤医師は、前投薬や酸素吸入を実施し、それで

と当時を振り返る。  
ただし、この検査は機器さえあればどこでも安全に受けられるわけではない。一部の病院は「心臓ドック」と称して、健診にマル

を持って医療機関を見極めたい。最新鋭機器を使った検査だからといって、むやみに受ければよいわけではない。甘言のついで損をするのは患者自身なのだ。

## 今週取材した医師・病院

高瀬クリニック  
循環器科  
近藤 武 医師  
住所/群馬県高崎市  
南大類町885-2  
電話/027-353-1156

このほかに「マルチスライスCT」を行っている病院

大和成和病院  
循環器科  
住所/神奈川県大和市  
南林間9-8-2  
電話/046-278-3911

名古屋ハートセンター  
循環器内科  
住所/愛知県名古屋市  
東区砂田橋1-1-14  
電話/052-719-0810

豊橋ハートセンター  
循環器内科  
住所/愛知県豊橋市  
大山町五分取21-1  
電話/0532-37-3377

桜橋渡辺病院  
循環器内科  
住所/大阪市北区梅田  
2-4-32  
電話/06-6341-8651

新古賀病院  
循環器科  
住所/福岡県久留米市  
天神町120  
電話/0942-38-2222